# 法の水茎 (47)

大正大学講師　髙橋秀城

江碧にして
鳥逾白く
山青くして
花然えんと欲す
今春看又過ぐ
何れの日か
是れ帰る年ぞ
（杜甫『絶句』）

（河は緑に輝いて、鳥はますます白く引き立ち、山は青く際だって、花は燃えるように真っ赤に色づいている。今年の春もみすみす過ぎ去ってしまった。いつになれば故郷に戻ることができるのだろう）

この漢詩は、中国の詩人杜甫（七一二～七七〇）が、戦を避けて移り住んだ場所から、故郷を思い慕って詠んだものです。鮮やかな春の装いに囲まれながら、いまだ故郷に立ち帰ることのできない辛い心情が込められています。

思えばこの春も、駆け足で通り過ぎていったように感じます。ただこの束の間に、突如として襲った熊本を中心とする大地震は、大地と心に大きな爪痕を残していきました。今なお、胸を締め付けられる思いで、月日を重ねている方々もいらっしゃるでしょう。一刻も早く、以前の故郷での生活が戻りますことを、心より願い続けて止みません。

茂りあふ
青葉も辛し
木の間より
光を花の
夏の夜の月
（『文亀三年歌合』政顕）

（茂り合っている青葉もよそよそしく見える。木の間からは、光を花のように散らしている夏の夜の月が輝いている）

ぎこちなかった若葉の梢も、少しずつ落ち着いた青葉へと移り変わってきました。勢いよく重なり合う新緑に、夏の足音を告げる月光が静かに降り注いでいます。季節は今、瑞々しい初夏を迎えています。

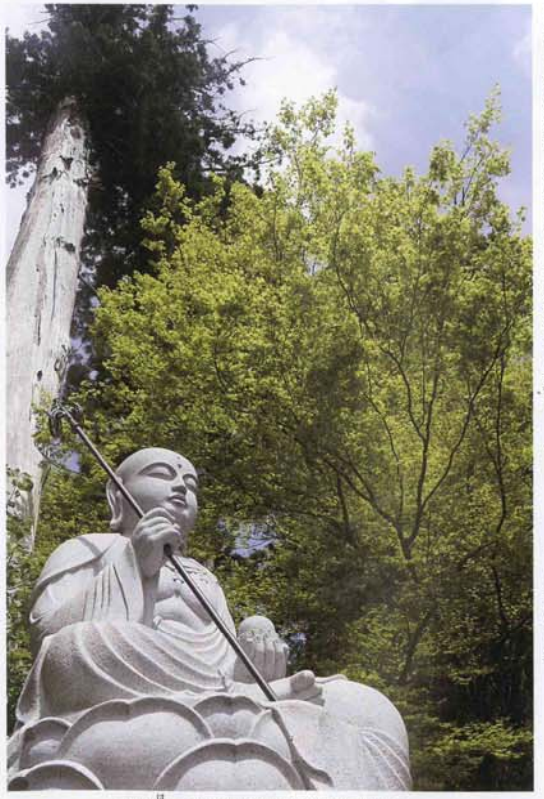
先月号では、十種類の善い行いのはじめとして「不殺生」を取り上げました。続いて今回は二つ目の「不偸盗」の教えについて書いてみたいと思います。

「偸盗」の「偸」も「盗」も「他人のものをひそかに奪い取る」という意味です。平安時代の説法書に「身の罪とは、殺生二次、偸盗をせず」（『百座法談聞書抄』）と記されているように、生き物を殺す「殺生」の次に強く戒められています。

「偸盗」をめぐっては、私の父が時おり口にする話があります。

昭和三十年代の高尾山での出来事。いつものように山内のお堂を参拝していると、お地蔵様の足元に供えられていたお賽銭が、いつも夕方になると消えていることに気づいたそうです。それは何日か続きました。

そこで「これは誰かがお金を盗っているのではないか」ということになり、何人かで待ち伏せをして、泥棒を捕まえようと試みます。



青葉映える青空に初夏の到来を感じる



## 折り折りの記 (81)

### アカシヤの花の揺り籠はぐれ猿

波多野　重雄

わが国でアカシヤというのは「ニセアカシヤ」のことである。棘の多い落葉高木で初夏を彩る白い蝶形の花を咲かせる。札幌、北京市の並木はつとに知られている。

或る日、私はケーブルの「高尾山駅」に大勢が見下ろす満開のアカシヤに猿が、風に揺れ見え隠れするのを見た。私は嘗て、歩いたことのある新疆（中国）の、灼熱の火焔山の麓を玄奘三蔵は天竺へ向った。西遊記の中で鉄扇公主と孫悟空が戦った場所であり、その妖猿を重ね見てうっとりした。

（髙尾山健康登山の会々長）

## 初夏遊歩

厚木市　荒井　一雄

一歩一歩向頂上
緑葉大樹感魂降
譲道後続暫休憩
返景染紅東天山

空の青
木々の緑に鳥がなき
髙尾の朝湯に酔ひぞ醒めたる
一歩一歩、頂上（と向かふ・・・
緑葉・大樹に、生ける
神魂の降臨するを感ず・・・
山道を後続（の人々）に譲り、
暫し休憩・・・
返景（夕陽の照り返し）は、
（大気の澄める）東方の
（遥か房総半島の）
空や山々をも、見事に
真紅に染めをることよ・・・

ある日のこと。お賽銭を手にした男を見つけると、すぐさま、その場で取り押さえました。さっそく麓の駐在所に突き出そうと考え、まずはお寺に引き連れてきたのでした。

すると、その騒動を聞きつけた髙尾山薬王院前御貫首・山本秀順師（一九一一～一九九六）は、大広間に皆を集めました。そして、次のように静かに語り始めました。「僧侶であれば、修行をして説法をするはずなのに、このように捕まえるとは何事でしょう。もしかすると、お腹が空いているのかもしれません。警察に連れて行くなどと言う前に、まずは食事を振る舞い、話を聞くべきではないでしょうか」と。

一同はその言葉を聞くと、意気揚々と猛り立っていた心がおさまっていったのでした。

（住職談）

この逸話を聞いたとき、私は兼好（一二八三頃～一三五二以後）の『徒然草』の一節を思い浮かべます。

他人の心になってみれば、愛おしい親や妻子のために、恥をも忘れて盗みをしてしまうこともある。盗人を縛り上げ、悪事を罰するよりは、飢えたり寒い思いをしたりしないように、世の中を治めるべきではないか。

人は、生活が安定していないと、心も落ち着かない。追い込まれて盗みをするのだ。世の中が良くならなければ、罪は消えるはずもない。法を犯させておいて、罪を罰するのは可哀想なことではないか。

（『徒然草』一四二段）

罪を戒め、罪を犯せば罰せられることは、至極当然のことのように思います。しかし同時に、その背後に隠れている困難にも目を向けなければならないのでしょう。

「偸生」という熟語があります。「生命を盗む」ことから、「無駄に生きながらえる」という意味です。人間は、何気ない日常の中で、何も盗んでいないつもりでも、生きるために肉や野菜を食べ、動植物の命を奪っています。知らず知らずのうちに「身の罪」を「積み重ね」てしまっているとも言えるでしょう。

自らの資財に於いて
常に止足を知り、
乃至草葉も
与えられざれば取らず。
（空海『十住心論』）

（自分が持っている物でいつも満足し、葉っぱ一枚でさえ、決して取ることはしない）

中国の故事にちなんで、日本では盗人のことを「白波」と呼びます。白く砕ける波は、もしかすると心の乱れを表しているのかもしれません。荒れ狂う波が凪いで、穏やかになった水面にこそ、まどかな心月が光り輝くのでしょう。

（栃木北部教区普濟寺中）